

Tokai Fubokon Letter

先生特集について

東海の教育を直接支えて下さっているのは、ご存知の通り様々なタイプの優れた先生方。そんな素晴らしい先生方をご紹介します、より深く東海を知って頂こうという企画です。

前半： 生い立ち～教員として

中間： 部活の顧問

後半： 声楽家として

鈴木健司先生

中学音楽科 中1担任
合唱部・オーケストラ部・
吹奏楽部 顧問

東海8年目

徳島県出身

今年度より東海の父母提携部長



小中 野球部 習い事でピアノ・ギター
高校 バスケ部
高2で声楽を始め、声楽家を目指す決意
大学 教育学部
教師になりたかったわけではなかった
一から音楽を学び直し、国内で先生探し
大学院 習いたい先生のいる大阪の大学院へ
演奏活動をしながら博士課程まで進む
ポスドクとして大学院に残り、2年研究を
続けたが、その後採用試験を経て東海へ

中学音楽科の鈴木健司先生は、ご存じの方も多いでしょうが、声楽家としてもご活躍中で、一度その声を聴いたら耳に残って虜になるほどの美声の持ち主です。そんな芸術家でもある鈴木先生に、教師としての思い、演奏家としてのこだわり、音楽に関するあれこれなど、たくさんお話を聞いてきました。時に熱っば

く、時に悩みながら、言葉を選び丁寧に答えて下さる姿からは元来の真面目さと芸術家としての信念が伝わってきました。特に音が心にどう伝わるか、独特の音の捉え方に引き込まれました。(取材日1/7)

—生い立ち～東海に入るまで

徳島の地方の公立中高出身。東海生とは全く違う環境で育つ。音楽好きで、習い事としてピアノやギターを弾いていたが、小学校では野球に打ち込み活躍。中学はその流れで野球部。高校はバスケ部に。吹奏楽部もあったが、女子が多くて怖気づき、それにそこまで吹奏楽をやりたいわけでもなかった。その後自分は何が一番好きなのか?を考えた時に、どうしても音楽がやりたかった(勉強も嫌だった笑)。親の強い反対があったが、専門的に声楽を習い始めたのが高校2年生。声楽を目指すにはすごく遅いスタート。

大学は教育系に入ったが、思いが捨てきれずやはり声楽家になりたくて、暗澹たる学生時代を過ごした。一から音楽を学び直し、教わりたい先生のレッスンが受けられる、大阪にある私立の大学院に入って6年。計10年の学生生活。声楽の研究と演奏活動が両立できるのは、この世界では研究職だけなので、そのまま大学のポストに残って演奏活動を続けていた。その後伸び悩みを感じたことと、結婚を考えて、専任職を探し、東海へ。自分が受かった理由として考えられるのは、地元の大学や中高、ミュージカル教室や、合唱団を作る際の指導者として出向くなど、幅広い世代に教えた経験を持つキャリアが珍しかったからではないかと。



合唱団の指導者

—高2で人生の決断をするということ

その時期に決めるのは相当な覚悟と同時に「雑草児」として生きていく覚悟をしたのだと思う。スタートが遅い自分にはすんなりいく道はないと思っていて、逆にそこにニーズや「雑草児」ならではのポジションがあると信じてやるしかない。自分には捨てるものはないので、いつもチャレンジして何か得られるようにというスタンスでいる。

—東海に入って

声楽のキャリアがあったからこそ教員活動ができているわけで、自分は雑草児としてこれを磨いていくつもりでいる。そもそも採用試験で歌わなかったということは、歌えるから入れたわけではない。自分が今、義務教育の現場で何ができるかをゼロから考え直している。東海8年目。自分ができると、新たに磨いていけるものを探しながら試行錯誤をしている。

—音楽の先生として

入った時は衝撃ばかり(笑)。答えるのが難しい…。大きな矛盾に気づいた。東海には色んなことができる生徒たちがいて、色んなことに取り組むことができる理想的な部活環境(オケ、合唱、カゾラカタ、吹奏楽、軽音など)が揃っている。音楽好きな子はどの間口からでも入っていける。学校に限らず、今や習い事でもいくらかでも音楽をやれる環境があるのだから、音楽の授業でそれらの真似事をする必要はないと思った。そもそも「心を育てる」を銘打つ教科なのに、子どもに教師が好みの音楽を享受させて、それが人間教育にどのように関わるのかという論理が見えてこない。何をやっても成立するし、どうアプローチしても、東海の生徒はついて来てくれる。じゃあ何をしたらいいのかを探っていた。音楽教育学者の中にはデューイという哲学者の芸術論をバックボーンに音楽の授業内容を研究しているグループがあり、そこで研究者との交流が生まれたり、発表を自らも行うようになって4年目。

—音を選び取る

我々は育つ過程で、自分の好む音を選び取ってきているはず(例:赤ちゃんのガラガラ、お母さんの呼び

かける声、ものをこする音)で、音楽は人間の欲求から生まれてきたもの。生徒たちに、教師が良いと思った音楽を上から与えるのではなく、音に反応して選び取っていくという欲求や感性を、授業で扱う題材に対して発展させていくような音楽を考えてもらえるようにしている。そうすることで心が豊かになる、というか音楽独特の心の動きに身を浸す

ことで、我々はものすごく楽しくなれる。一人一人の心の中はいつも自由だから、音を聞きながら、楽しみながら、音楽を聴いたり演奏したりするのは楽しいこと。誰かが「良い音楽だ」というものをやらされたり、やったりすることに楽しみはそんなにない、と僕は思う。だから演奏家として培ってきた経験や楽しさと、今生徒にやってもらっている楽しさは全く同質のもので、そこが4年目に入ってやっと自分でじっくりいくようになってきた。生徒が音楽を聴いて思ったことや、こんな風に音楽を作ったというのを聞くのがとにかく楽しい。クリエイティブな活動は中高の授業では少ないはず。将来第一線で活躍する東海生に、仲間と関わり合いながら情動を感じたり情景を思い浮かべたりする授業もあって良いのではと思う。

—コロナ禍での音楽の授業

突然のことですごく困った。でも不思議とかえって良かったこともたくさんあった。例えば高校生はタブレットで演奏の録画を撮り、振り返りの会話を録音してその時の振る舞い(パフォーマンス)を評価したり。校歌の歌唱テストは、自宅で撮ってGoogleクラスルームで提出させ、採点とコメントをルーブリック評価とともにWeb上で返却したり。リコーダーが使えないからその分をiPadにあてて、提出の難しい課題を写真や動画に残して一覧にしたり、スピーカーではなく、iPadから個別に音や動画を鑑賞させたり。ICTを利用した色んな授業展開ができたのは、コロナのおかげかもしれない。



父母懇行事では司会を務めて下さることも多いので、心地よい低音ボイスに耳を澄まして聴いてみてください

一 等の導入

箏は新しい授業を開始した頃に始めた(日本学術振興会の基盤研究(c)を行う研究者に協力をしていて、現在8年間のうちの4年目)。触ると誰でも音が出せる箏はすごく良い。技術はほとんど度外視して、限られた時間の中、自分たちの音を作ってもらおう。例えば「さくらさくら」の存在していない前奏はどんな情景から生まれるか? どんな「さくらさくら」にしたいか? など曲の構想を聞くと、色んなことを生徒は言う。そして思い浮かべた情景をどう音にしていくかを考えてもらおうと、個別に全然違うものが出てくる。なぜなら生活経験が違うから。その中で「これがやりたかった」が見える演奏や、自信を持って創造的な活動に没頭している生徒を見た時、とても嬉しい。各クラス各生徒のオリジナリティが出てくる。

一 グループでの学習

関わり合って学ぶことが大切だと考えているので、大体2人~4人のグループで学習活動を行うことが多い。実は数年前グループでの学習を導入した際、高校生から反発を招いたことがあった。おそらく仲間と話し合いながら納得解を見つけていくような活動は、僕の独りよがりの授業だと感じたのだと思う。音楽科の場合は、最短距離で答えを導く考え方よりも、新しいアイデアを出したり、他者の意見を組み合わせたりする方が多い。創作活動において衝突するのはすごく本質的なこと。お互い話し合いながら折り合いをつけていくのは、実は結構重要だと思う。最初は生徒たちを混乱させたかもしれないが、学び方がわかってくれば、自分達なりの創造的な表現を自ら楽しんで追究してくれる。今年度の高校では、ギターユニットによる活動を行なったが、4人グループでコミュニケーションを楽しみながら10時間以上かけて表現を工夫する姿が生まれていた。数値には表れないところで生徒が学んでくれているのではないかな。

一 担任として気をつけていること

2年目からは担任業務をしているが、仕事として大

きいし、責任は重い。担任と教科の仕事が両輪で回っていく。担任としては…これが絶対良いというものは見つからない。うまくいかないこともよくある。生徒のことを大切にしているつもりでもそれがどうも伝わらないことがある。最近思うのは、一人一人の心はよく分からないブラックボックスに包まれて、本当の心の中は分からない。教師とは、こういう刺激を加えればこう反応するとどうしても思ってしまう職業で、そう思わないようにすることが生徒を大事にすることにつながると思っている。これからもっと経験を積み、自分の引き出しが増えて、もっと柔軟に対応できるようになりたい。

一 部活の顧問のスタンス

音楽が好きの子たちが本当に充実した活動をそれぞれの部でできていると思うから、僕は裏方としてできることをやっている。合唱部、吹奏楽部、オーケストラ部の顧問だけれども、各部活の顧問の先生が必要とするちょっとしたお手伝いをしたり。面倒な仕事を他の顧問の先生方にやっていただき、感謝している。

一 音楽部を続ける理由

(父母からの相談:息子はコロナ禍で何時間も壁に向かって練習して、合奏の喜びもなく、何のために音楽を続けるのか?という状況で…)

生徒たちは本当に辛いと思う。目標にしていた定期演奏会やコンクールは軒並み中止になったり。練習では感染予防のために色々な制約を課せられ、さらに仲間との接触も減った。それはどこの部活でも起こっている。加えてコンクールを目指す、テストのスケジュールなど進学校としての制約も東海にはある。それでも他校の中に入って行って結果を残している生徒達の能力には驚かせられる。先日(12月)吹奏楽部も定期演奏会をしたけれど、本当に上手。限りある時間も、環境も多分不十分だろうけれども、厳しい練習に耐えているのだと思う。僕は聴いていて気持ちよかった。オケは4月2日に定期演奏会があって、選んだのはドボルザークの「新世界」。本当に美しい作品。これだけの規模の歴史的名曲を、毎年演奏している。音楽部の中では最も歴史ある合唱部も東海



地区唯一の男声合唱団として活躍中。これから定期演奏会なども企画できる大きな団体に成長していくと思う。それぞれの部活動をぜひ生の舞台上でも見届けていただきたい。

一方向が正しい演奏

西洋音楽の基本は調和(ハーモニー)。遠目で見ても、近くで見ても調和されている美しさがないといけないが、日本人の感性とは全然違う。日本人が西洋音楽をやる時、どうやって自分たちの味を出すか。調和だけになったら僕は限界があるような気がする。西洋人の真似事で本当に面白いのか?と。だから「自分を表現すること」と、「技術で調和させること」を、当然両輪で考えていかなければいけない。演奏家にとっては自分を表現することは当たり前なのだけれど、子どもたちは意外と表現の車輪がない。調和させることばかり言われると音楽は味気ない「技術」の車輪だけになってしまう。そういう音楽は聞いていて、結構怖い。音としては正解だし、音の粒はそろっているけど、その分かち難い音楽の諸要素がイメージとして統合されていないから、なんか伝わってこない。だから指揮者の役割は大きい。だから指揮者がどんなイメージを持って導くかが決定的に重要。

一指揮者

そういう点でオーケストラ部はあれだけの演奏会の規模を生徒が指揮をしてこれまで伝統を作ってきた。民主的に指揮者を選ぶところが良い。吹奏楽部顧問の先生方や合唱部顧問の先生の指揮は抜群に素晴らしい。指揮は人に教えられてその通りに学べるものではないのは教育現場と同じ。生徒達はここで学んだことを活かして今後大学に入って自分の演奏スタイルを確立していけば、生涯を通じて音楽を愛好していけると思う。

一声楽家の活動を続けている理由

歌を歌うことはパートオブライフ。昔は好きでやっていたが、今は自分もやめられないし、やらなきゃいけないと思っているからライフワークでもある。演奏すること自体が本当に好きで、自分の音楽的な考えを演

奏を通して人前で発表し、レスポンスを得られることは実に楽しい。それが続ける理由。音楽を学ぶということはアクティブラーニングするということ。積極的に自分で学んだことを舞台上でアウトプットして、レスポンスを得て、自分が生み出した作品から自分が影響を受けて、自分の内面がまた変わる。それがまたパフォーマンスしたいという理由になって、作品と自分の往還が続く。それが楽しい。出さないと出てこない。自分の内面の中だけでエンドレスに回るだけの知識や教養があっても満足できないし、信じられない。40歳を超えて技術的な課題が解消されてきたこともあって本当に今が一番楽しい。だんだん体と共に衰えてしまうし、やらなくて済むならやらない方がいいっていうほど大変なのだが、本当に楽しいから続けている。



コンサート

一声を保つこと

40歳前後から声のデリケートな部分に直面するようになったと感じる。声は出やすくなっているが、体調も含めて、すごくケアを要することに気づいた。それからはお酒も飲まなくなり、食べ物や普段のトレーニングにも気をつけている。最もいけないのは練習しないこと。一発で声がダメになる。コロナ禍で本番が全部なくなり、歌う時間・ルーティンのトレーニングが減ってしまった時に僕も調子が悪くなった。発声は体の中のものすごくデリケートな部分をポンとつなげる感じがあって、それがなくなってくる。だからとにかく練習して、とにかく歌う、人前で歌う機会を作ることに尽きる。僕に来る仕事は、色んな人が断ったのかと思うくらいハードワーク。やる時には優先順位を変えて、全て演奏のことだけを考える。それでは本当はダメで(笑)、やらなきゃいけない義務は果たすのだけれど。

精神的な部分で全部切り替えていかないと、他の演奏家の方達と一緒に演奏することはとてもじゃないけれどできない。



オペラ

〈ちょっと余談で〉

—恋をしないと歌えない？

恋をしている人はとても魅力的。なぜなら心が動いているから。だから芸術家は恋をしないとイケない。恋愛という意味での恋では必ずしもなくて、夢中になって何かに心が動かされていることが必須。

—生まれつきの声？

普段話す声も生まれつきではなく、作り上げてきた声。僕は割と低くて、だからチャンスがあったと言える。もう少し高いと仕事はあまりなかったと思う。チェロなのか、バイオリンなのか、という違いは元々の喉にあるから、多くは身長に比例するのだけど、その逆もある。僕は特に低い。

—体の大きさと声楽

意外にもオペラの本場、イタリアには小柄な人が多い。イタリアオペラのテクニックを学んだのは、彼らは効率的に声を出していて素晴らしいという歴史的な評価が一般的にあるから。今は声楽研究が進んで、体がものすごくふくよかであることは必ずしも音には影響せず、やはりテクニックだと言われている。僕が体が大きめで良かったと思うのは、共演する女性が長身の時に自分の方がかろうじて高かった時とか(笑)、中学生くらいの役と対峙する時とか。オペラじゃなかったら関係はない。体型によらず素晴らしい声の方は大勢いらっしゃる。

—父母懇の父母提携部長となって

父母懇の仕事は最終的に自分の目の前にいる生徒に還元されていく活動だって信じていないと、私利や自分の都合ではできないほど大変。代表の北村先生、笠行先生には頭が下がる。そして父母の方々にもいつもよくしてもらっている。今までも何度も救われた。東海じゃなかったら経験できなかったかもしれない、と自分も保護者になって思う。息子の通う公立の小学校のPTAがすごく難しい状況になっているのを見ると、

お母さんたちが孤立し、煮詰まっていて、不安や不満を濃縮させている。うちの父母懇は、多分同じような不安・不満があっても濃縮の度合いが薄まっていると思う。僕なんかは「息子さんはすごいんだから、そんなに不安に思わなくてもいいんじゃないですか？」と思うのだけれど、それでもそれぞれの親にとってはきっと不安や不満があって、それが少しシェアされて建設的な方向を向いているというか。そういう期待・希望を持ちながら、いつも父母懇・地域懇のことを良いなあと眺めている。繋がりがすごい組織だと思う。幹事の方は白羽の矢を立てられて、役を担い、不安の受け皿になって色々な思いをされているというのめだんだん分かってきて、それもすごいことだと思う。

【インタビューを終えて…父母の感想】

東海生は音楽の授業で何を学んでいるのか、とても興味をもってインタビューに臨みました。教員であり、ピアノの演奏家である鈴木先生のお持ちになっているオーラに魅了されながらお話を伺っておりました。

音楽を通して「創造力」「共感力」、生きていく上での本質のようなものを伝えて下さっていることに、大変感激いたしました。コロナ禍での授業のあり方を模索され、常に前向きに進まれていることも分かりました。ピンチをチャンスに。東海生がこれから出ていく社会という海原で、前に進んで行く為の力になるのだなと感じました。

お箏の授業など東海ならではのユニークな授業を展開されており、そんな東海生達は幸せだなとつくづく思いました。

編集後記

コロナ以前の地域懇で、ピアノの弾き語りをお聴きした時に「一耳惚れ」。この度は鈴木先生のルーツ、行動力、情熱、集中力、適応力など様々な面を知ることができました。感情に直接影響を与える「音楽」を通して、ご自分が教師として伝えられることを追求する姿勢、生徒のことを心から思う苦悩、声楽家としての素晴らしいキャリアに対しても謙虚で、その道に邁進する気構え、詩的な会話、マスクをしても気づく感情の表現力。インタビュー自体が一つの舞台を観ているような高揚感で満たされました。ぜひいつか鈴木先生のオペラを観劇したいと思います！